

# ホッペンフェルド原書第4版: 整形外科医のための手術解剖学図説(翻訳版)

2011年7月にHoppenfeld:Surgical Exposure in Orthopaedics, The Anatomic Approach 4th Edition)の日本語訳が出版されました。

- 浜松医科大学名誉教授 長野 昭先生に監訳者のお一人になって頂いて、上肢の領域の監修を充実できました。
- 総頁数が第3版714頁から第4版748頁と増加しましたが、価格は第3版と同額に抑えてもらいました。



初版1986年. 556頁、38,000円

2版1996年. 614頁、38,000円

3版2005年. 714頁、38,000円

4版2011年、748頁. 38,000円

## 翻訳版の特記事項：

- 本書の初版では骨膜下展開の概念が強調されていた。骨膜下展開では、手術進入に際して骨に接する重要器官を損傷することはないという利点がある。しかし骨と周囲の軟部組織の血行ごしく損なわれる。展開部の血行を保つことはこの24年間一貫して変わらないテーマである。第2版において、骨膜下展開の概念は捨てられることになり、替わって骨膜上面の手術という方法が打ち出された。
- 第4版では世界的な趨勢である最小切開手術の新しいアプローチが記述されている。新しい最小切開アプローチとしては上腕骨、大腿骨遠位部、脛骨近位部・遠位部が加えられた。

手術の目的。①無痛性、②荷重に耐えること、③可動域を回復することの3点が骨関節手術の目標であると教えられ、教えてきた。手術侵襲や手術瘢痕は小さいことに越したことはない。上記3目標が到達されていれば、手術瘢痕が多少大きくても患者さんから苦情を言われたことはない。小さい皮膚切開からの手術のために、軟部組織を無理に長時間開窓しておいた結果、軟部組織の壊死を起こして固い瘢痕を残す結果になり、3大目標を獲得できないようなことは避けなければならない。最小切開手術を導入する前に十分に検討しておいて欲しい事柄である。

2011年7月18日 寺山和雄記